

「今日からアナタはメスガキセクサロイド」

※ () 内がシーン番号。

※セリフ 「」上の数字がバイノーラルの立ち位置番号です。

#0

(1)

SE：電車の走行音

アナタ、痴漢ちかんをしている。

(2)

9 「細い腰こし、揺れるスカート、柔らかそうなお尻しり。手を伸ばせば、触れられる距離きょり。
どことなく汗臭い満員電車の中で、ほのかに漂うただよう、若い女の子の甘い香り。

それはまるで、熟れはじめた百合の花のよう。

いけないことだとは思いながらも、アナタは重力に引き寄せられるようにして、
目の前の、セーラー服を着た女子校生のお尻しりへ、そろそろと手を伸ばしてしまった

(3)

2 女の子の漏れ出る喘ぎ声「んっ……んあっ……ううっ」

(4)

9 「手の平ひらに伝わる柔らかな感触、女の子特有の滑らかな曲線に、あなたはうつとり
してしまう。胸の鼓動こどうは速くなり、次第しだいに体が熱くなる」

(5)

SE：理紗が手を払い除ける音

9 「指を強く弾かれ、アナタは手を引っ込める」

9 「怯えた女子校生のすぐ横に、鋭い眼光の女の子が立っている。髪はピンクのメッシュ混じりで金髪。ラフに羽織った白衣。内側に着込んだ派手なシャツからは、大きく胸元がのぞき、黒いデニムのショートパンツからは魅力的な足がすらりと伸びている。唐突に白衣姿のエッチな格好のギャルが現れて、アナタは少し、非現実的な印象を受ける。

その抜群のプロポーションに見とれている間に、アナタは腕を強く掴まれ、あっさり拘束されてしまう。食い込んだ爪で腕がチクリと痛み、アナタの頭に不意に理性がもどつてくる。
痴漢がバレてしまつたのを少し遅れて自覚して、とたんに冷や汗が湧きあがり、背中をぐつしょりと濡らしていく

(6)

4 「囁く）お兄さん♪ 次の駅で一緒に降りよっか」

SE：電車の扉の閉まる音

(7)

9 「固く冷たい感触が背中から伝わって、アナタは意識を取り戻す。ここがいつたいどこなのか、周りが暗くてよくわからない。
ぼんやりする頭に、少し前の記憶がよぎる。エッチなギャルに連れられて電車を降りたかと思うと、アナタは首に何か注射のような物を打たれて……次の瞬間、アナタの体は痺れて動かなくなり、すぐに意識を失っていた……。それが今、思い出せる最後の記憶」

(8)

※ここ微エコーかけるかもしません

5 「てすてす、マイクテスト♪ 聞こえますか？ お兄さん♪」

9 「頭の中に直接響くような声がして、アナタは何か言い返そうとするけれど、

体が痺れて声が出ない」

(9)

5 「んふふ♪ 聞こえてるう？ さつきは手荒なことをしちゃってごめんね♪

お詫びも兼ねて、まずは自己紹介でもしてあげよつかなあ♪。アタシは中谷理紗。
ただのギヤルに見えるかもしけないけど、生体信号処理が専門の研究者。

とりわけ筋電義手を発展させた分野が専門なんだけど、

最近は頭を良くするスイーツの開発とかも手がけてて……って、
そんなことどうでも良いか♪

ここがどこかもわからなくて、きっと混乱してるよね。

ここはアタシのラボ。そしてお兄さんが今いるのは、アタシのつくった

なんと医者いらざで脳移植できちやう、画期的かつ傑作。

そして自信作の発明品！ の試作品の中だよ」

(10)

5 「どしたの？ 不安そうな顔してんねえ。

そつちから何も見えなくともこつちからはばつちり見えてるんだよ。

脳波^{のうは}もモニターしてるから、だいたい何考てるかってことまで、筒抜けなんだから」

(11)

5 「まあまあ、確かにこれは実験だけどお兄さんのためでもあるんだよ？

お兄さん、かなり性欲溜^たまつちやう方でしょ？ しかも、その性欲を満たして、

気持ち良くなるためだつたら、多少のリスクを冒しても

構^{かまわ}ないタイプ。だって、痴漢^{ちかん}って、もしバレたら社会的に死んじやうのに。

お兄さんは目の前の女の子の魅力に勝てなくて、本当はダメなことなのに。

見ず知らずの女の子の敏感^{びんかん}なところを触つちやう。無意識かもしけないけれど、

お兄さんはたとえそれが破滅的^{はめつてき}な行為でも、

気持ち良くなるためなら、簡単に欲望へ魂を売り渡しちやう

(12)

6 「だからこそ、アタシたちは良いパートナーになれる♪ アタシの試作品の実験に付き合つてもらう代わりに、お兄さんには、とつても敏感^{びんかん}で気持ち良くなれる体をあげる。それは今まで感じたどの快感よりも、ずっと気持ち良くなれる、特別な体。

想像してみて？ もしも自分の体が、指一本で軽く肌を撫^{なで}でられるだけで絶頂する体になつちやつたら。

もしも、風が髪を揺らすだけで、体が快感で痙攣するようになっちゃつたら。

そんな体で、もしも、ただでさえ敏感な部分を弄ばれちゃつたら……。

そんな体で、同時にいろんなところを攻められちゃつたら……。
気持ち良すぎておかしくなつて、壊れちゃうかも♪
けどお兄さんなら、たとえ壊れちゃうかもしけなくとも、そういう体になつてみたい。
そう思つてくれるはずでしょう?」

(13)

4 「ふふ♪ いいんだよ。そう思つてるのはわかつてるから。

じゃあ、そろそろ実験を始めちゃおつか♪

といつても、お兄さんは特別なことをしなくて大丈夫。

マシンから流れる私の声だけを聞いて、そこで横になつてね♪」

(14)

SE：機械の操作音

SE：ボタンの音

(15)

5 「あつ。なんか緊張してるでしょ?」

技術が進んだとはいえ脳移植はデリケートな手術だからさ、手術を進めるためには脳が十分リラックスしていいないといけないんだよね♪

まずは一度、深呼吸でもしようか?

さあ、息を大きく吸つて♪。

ゆっくりはいて♪。そうそう、そんな感じ。

そういうえば、知つてる?

深呼吸つて普段からする呼吸とは全然違うもので、深呼吸するだけでもリラックス効果があるんだつて♪

すつて♪。はいて♪。

ふふ♪ どうかな? 少しは落ち着いてきた?

まだ少し緊張が残つてるかな?

じやあ、さらに緊張をほぐす効果のあるガスをマシンに注入していくね」

(16)

SE：しゅ～つ

9 「甘い香りのガスが、マシンの中を満たしていく。バニラのような、果物のような。体を溶かしてしまいそうなほど甘い香りが、アナタの体を包み込んでいく」

(17)

1 「すって～。深く呼吸をするたびに。はいて～。むせかえりそうなほど、甘い香りが。

すって～。肺の中へ、しみ込んでいく。はいて～。体の中がどんどん甘くなっていく。すって～。吸い込むほどに。はいて～。体が甘くなっていく。すって～。吸い込むほどに。はいて～。ほんのり気持ち良くなっていく。すって～。吸い込むほどに。はいて～。頭がぼんやりして。すって～。気持ちいい。はいて～。頭がぼんやりして。はいて～。何も考えられなくなっていく。すって～。頭がぼんやりするのが。はいて～。気持ちいい。気持ちいい。すって～。気持ちいい。はいて～。気持ちいい。気持ちいい。

(18)

5 「ガスを吸うのって気持ちがいいでしよう？ なんたって、このガスを吸うだけで、

ひくひくして、イッちゃう人もいるんだから♪

さあ。いい子だから、もつとたくさんガスを吸おうね♪

そうしたらもつと気持ち良くなれるよ♪

さあ、手足にぐぐっと力を入れてみて～。体に残った力を振り絞るよう

に。さあ、ぎゅぎゅ～っと、力を入れて～。

……そうそう。

さん、にい、いち。ゼロ♪

7 「(耳元で息を吹きかける) ふう～つ♪」

5 「力がふわっと抜けていく。

力が抜ければ抜けるほど、体にガスが入り込みやすくなつていくからね♪
さあ、もう一度。手足にぎゅううと力を入れて♪
さん、にい、いち。ゼロ」

3 「(耳元で息を吹きかける) ふうう♪

5 「力がふわうと抜けていく。
体から力が抜けていく。しほんだ風船みたいに、手足がくたくたになつていく。
けれど、それが心地いい。甘い甘い、クリームみたいに濃厚なガスが、
とろとろと体に流れ込んでくる。全身が、なんだかぽかぽか温かくなつて、
どんどん気持ち良くなつていく」

(19)

5 「すつて。はいて。呼吸するのが気持ちいい。すつて。
気持ち良くてたまらない。はいて。頭の中どんどん真っ白になつちゃうのに。
すつて。ガスを吸うのをやめられない。はいて。吸うのが気持ち良くてやめられ
ない。すつて。はいて。すつて。はいて。アナタは甘いガスを吸うことに、
どんどん夢中になつていく」

(20)

5 「すつて。体がガスに満たされて。はいて。幸せな気持ちに満たされていく。
すつて。アナタの意識が甘く染そままつて。はいて。

もう自分が誰かもわからなくなつていく。すつて。わからないけど、気持ちいいか
ら。はいて。ガスの中へと沈んでいく。すつて。甘い甘いガスの海へ。はいて。
アナタの意識は沈んでいく。すつて。沈んでいく。はいて。沈んでいく。すつて
。沈んでいく。はいて。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。
沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく (FO)

(21)

6 「ふふつ♪ そんなにとろけた顔しちやつて♪ とつてもすてき♪
さあ、好きなだけガスを吸つてね、お兄さん♪」

SE：ガスの海

(22)

5 「どうかな？ たつぱりガスは吸えたかな？
そろそろ、お待ちかねの、気持ちいい体になる手術を始めよっか♪
ああ、そうだ、念の為。手術に同意でもしてもらおうかな。大丈夫。
形式的なものだし、この光景は実験映像として記録してあるからね、
ただほんの少し頷くだけでいいよ♪

——アナタはこの実験に同意しますか？

——アナタは快感を得るためなら、性別が変わることにも同意しますか？

ふふ♪まあ、聞くまでもなかつたよね♪お兄さんはカイカンのためなら
何でもしちやうんだから。当然、全部に同意しちやう。
それがお兄さん。それがアナタ。（耳元で） そうだよね？」

(23)

5 「それじやあ、手術を始めるよ♪途中、
アタシの声が聞こえにくくなつちやうかもしけないけど、
ちやんとすぐに聞こえるようになるから安心してね♪」

(24)

7 「3、2、1. ゼロ。アナタの頭に何かが触れる。優しくて、柔らかなそれは、まるで、小さな女の子の指のよう」

(25)

3 「3、2、1. ゼロ。やさしい指がアナタの頭を包み込む」

(26)

7 「3、2、1、ゼロ。アナタの頭が、ふわりと宙へと浮かびあがる。

それはとても優しくて、少し懐かしい感覚。

ふわふわ♪ ふわふわ♪

頭だけで、空を飛んでいるような、

ふわふわ♪ ふわふわ♪

不思議で、開放感のある感覚。

ふわふわ♪ ふわふわ♪

まるで子供にもどつたよう♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪

軽くて、どこまでも浮かび上がってしまいそう♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪

甘い感覚がアナタの頭の中に満ちていく♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪ ふわふわ♪ ふわふわ♪

(27)

SE..次のセリフ、ノイズを入れる加工をします

5 「ふわふわ♪ ふわふわ♪ アナタの脳みそが体から取り出される♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪ アナタの脳みそが、意識が、体から離れていく♪
ふわふわ♪ ふわふわ♪ 脳みそだけになつたアナタはもう、うごけない♪
ふわふわ♪ ふわふわ♪ アナタにできるのは、ただ気持ち良くなることだけ♪」

5 「ふわふわ♪ ふわふわ♪ 甘い感覚に包まれたアナタの前に、
裸の小さな女の子が現れる。女の子は目をつむつて、
気持ち良さそうに、スヤスヤと眠っている。

銀色の髪、長い睫毛、水色の潤んだ唇、華奢で小さな手足、色白でツヤのある肌。
そして、その小さな体には少しアンバランスな、大きな胸。
そう、それはアナタの新しい体。新しいアナタ。

敏感で、少し触れるだけで絶頂してしまうくらい感度良好な、アンドロイド。
それも、セックスをすることに特化した、セクサロイド」

(29)

5 「アナタはその女の子にゅつくりと近づいていく。

その小さな体にゅらゅらと吸い寄せられていく。

ゅらゅら♪ ゆらゅら♪

引力のように、それが当たり前であるように、女の子に引きよせられていく」

(30)

1 「今からカウントダウンしていきます。ゼロになると、アナタは小さな女の子の
セクサロイドの体に完全に取り込まれ、セクサロイドとして絶頂し、
シャットダウンしてしまいます」

(31)

7 「5」

7 「アナタの意識が、女の子の体に吸い込まれて、溶けていく。
頭の中に小さな光の玉が生まれる」

(32)

3 「4」

3 「アナタの手足の感覚が徐々に戻つてくる。

けれど、それは華奢で敏感で力が入らない、小さな女の子の手足の感覚。
光の玉が頭の中で増えていく」

(33)

7 「3」

7 「敏感な体の感覚が全身から伝わつてくる。柔らかな肌が空気に触れるのが、
心地いい。

胸にかかる大きな胸の重さが、水色の乳首が揺れるのが気持ちいい。
髪の当たる頬が、ゾワゾワとした快感を放つて、
頭の中をビリビリと痺れさせていく。

光の玉が体の中に広がつていく」

(34)

3 「2」

3 「乳首がピンと立ち上がり、お腹の奥がじんじんと熱くなつてくる。

変わり果てた股間についた、つるつるとした女の子の割れ目からは、

アナタの意思とは関係なく、とろとろと粘っこい透明な液体が溢れてくる。

それはアナタの愛液。^{あいえき。}男だったアナタが、絶対に流すことのない、女の子の体液。

それに気づいたアナタは、自分の体が女の子のものになつてているのを、強く自覚してしまう。

ちよつと今まで男だったのに。

大きなおっぱいぶら下げる。^{ちくび}乳首立たせてちやつてる。

ただ横になつてるだけなのに、勝手に華奢な体を震わせて、

割れ目とお腹を熱くして、

とろとろの愛液^{あいえき}こぼしちやつてる。

恥ずかしいのに、恥ずかしくてたまらないのに。

お腹が熱い。割れ目が熱い。

愛液溢れるのがとまらない。意識すればするほど、どんどん溢^{あふれ}れて、こぼれちやう。

男だつたくせに、情けないのに、割れ目がどんどんぐちやぐちやになつていく。頭の中の光の玉がどんどん大きくなつていく」

(35)

7 「1」

7 「きちやう。何かがきちやう。大きな波みたいな快感が押し寄せてくる予感がする。

男の時には感じしたことのない、真つ暗な夜の海のような、

何もかもを飲み込んでしまう快感が、すぐそこまできてる。

やだやだやだ。怖い。怖い。怖い。この快感に飲み込まれたら戻れない。

でも感じたい。もつと気持ち良くなりたい。この先までいつてみたい。

そんな恐怖と期待の入り混じった感情が、アナタの頭を支配する。

アナタの複雑な感情とは裏腹に、アナタの体はとても素直で、もうすでに、

迫り来る快感を期待して、受け入れようと震え始めている。

小さな体が揺れ始める。

頭も腰もガクガクと震え、髪がバサバサと頬に当たりはじめる。いく、いきそう。もういっちやいそう。すごいのきちやう。

ガクガク揺れる頭の中で、光の玉が、チカチカと点滅を始める」

(36)

3 「ゼロ」

3 「絶頂する。光の玉がバチバチと火花をたてて爆発する。爆発が巨大な快感となつて体の中をバリバリと突き破つっていく。イクイクイクイク♪快感の電流がかけめぐつて絶頂する。

体がガクガク痙攣して、細い手足の関節が、人間なら本来曲がらない方向まで捻れて、引き攣つたように震えている。イクイクイクイク♪

電流が、快感が、頭の中を焼き尽くしていく。

快感が、電流が、アナタの頭の中に押し寄せてくる。

体が痙攣するたびに、快感の波がやつてきて、アナタを絶頂させ続ける。

イクイクイクイク♪

頭の中が真っ白になつていく。

イクイクイクイク♪

セクサロイドとしてシャットダウンしちゃいそう。イクイクイクイク♪ 気持ちいい。気持ちいい。

頭の中がばちばちして、痺れて、痺れて、痺れて。

真っ白に染まつていくのが気持ちいい。

すべてが真っ白に。真っ白に。真っ白になつていく」

5 「意識が、シャットダウンして、真っ白な世界へ飲み込まれていく。
意識が、真っ白であたたかな海へと沈んでいく。
沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。
沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。
沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく (FO)」

#2 メスガキセクサロイド

(38)

SE・システム起動音

5 「体にピリっと電気が流れ、アナタの体が再起動する。深いところまで沈んでいた意識が、ゆっくりと戻ってくる。小さな女の子としての体の感覚が鮮明になっていく。頼りない、細くて華奢な手足。

人間よりもずっと透明感があり、柔らかい肌。

風がなでるだけで、さざめくような快感が走る、敏感な体。

あわい 淡い水色をした、透き通るほどに、みずみずしい唇。

アナタは自分の体がセクサロイドになってしまったのを思い出す

(39)

1 「おはよ」

(40)

9 「ぼんやりと目を開けると、理紗がはるか頭上からアナタを見下ろしている。

電車の中で会った時よりも、理紗のことがとても大きく感じられる。

アナタは、それくらい小さな女の子の体に押し込められてしまったのだ

(41)

2 「そんないやらしい体で、しかもちっちゃな女の子タイプの、いかにもマニア受けしそうなセクサロイドに生まれ変わった気分はどう?」

(42)

9 「伸びた指先で少し乱暴に乳房がなぞられ、

アナタの体が大きくビクンと跳ねあがつてしまふ」

(43)

3 「ふふっ♪ 感度は良好。その下品な太い乳首とピンクの乳輪はだてじやないね♪
もう少しいじめてあげようか？」

(44)

9 「指先で両方の乳首の先をつままれたかと思うと、一気に強くひねりあげられる。
針で突き刺したような痛みと同時に、フラッシュをたいたように、
まばゆく輝く快感が、頭の中を強烈に痺れさせていく。
アナタが『やめて』と声に出そうとするよりも早く、
また両の乳首が、爪を立てられ、ひねられる。
何度も、何度も、何度も、何度も、何度も。
ひねられるたび、頭の中でフラッシュがたかれり」

(45)

7 「パシャリ。パシャリ。

またたく快感に踊らされるように、身をよじり、アナタはいやらしく胸をゆらす。

逃げ場のない、快感をこらえようと、身のよじりかたを変えてみるけれど、

みだらに乳首は硬く尖つて、ひねられる快感を前より強く求めてしまう」

(46)

3 「パシャリ。パシャリ。

乳首ちくびがねじれ、頭しびれが痺しびれれる」

(47)

7 「パシャリ。パシャリ。

フラッシュが頭の中に、女の胸でしか感じられない快感を丹念たんねんに焼き付けていく」

(48)

3 「パシャリ。パシャリ。パシャリ。パシャリ。

体が震ふるえて、息がどんどん上がってしまう」

(49)

10 「ふふ。神経もうまく繋がってるみたいだし、今度は意識の確認をしようか♪」

(50)

9 「快感で今にも崩くずれれ落ち落ちそうなアナタからぱつと指を離して、

理紗りさが今度はアナタの髪を優しくなでる。

お腹おなかの底まで火照ほてつてつてもどかしくなつた体が、

撫なででられるうちに、少しだけ収まつていく。

頭なでを撫なででられる、優しい快感に包まれて、息が少しだけ整ととのつてていく

(51)

10 「まずは、そう……アナタの名前、ちゃんと思い出せるかな?」

(52)

9 「アナタは快感の名残りの中、ぼうとした頭で、本当の自分の名前を思い出そうとするけれど、思い出そうとしたそばから、泡がはじけるように、それはあつという間に消えてしまう。

代わりに、アナタはなぜか今の自分の名前がエリだということを、はつきりと、ごく自然に思い出して、こくりと頷く

(53)

10 「じゃあ、次の質問♪
アナタはアタシにとつてどんな存在？ 自己紹介してもらえる？」

(54)

5 「アナタは、普段の自分のことを話そうとするけれど、うまく言葉がでてこない。アナタがまごまごしているうちに、アナタの頭の中に言葉が浮かぶ。

『私は、理紗様のセクサロイドです。

理紗様を望むままに満たしてさしあげることこそが、私の存在意義です』

(55)

10 「よく言えました♪」

(56)

9 「ただ、思い浮かんだだけだと思つていた言葉が口に出ていたことに
アナタは気付く。

しかも、言葉にしている瞬間、アナタはとても幸せな気持ちに満たされていた。
なぜなら、今のアナタは人間ではなくセクサロイドだから。

アナタの体の所有権は、マスターである理紗のもの。

話すことも、動くことさえも、理紗の望み通りにしか動けない。

理紗のどんな言葉もアナタには甘い麻薬のように感じられる。

たとえ罵られたとしても、その言葉はアナタをたちまち酔わせてしまう。

理紗の望み通りに動けば動くほど、

言葉にできないほどの充足感と快感が体の芯から湧き上がる

(57)

7 「（右耳で囁く）どうしたの？ エリ。少し表情が硬いんじゃない？ もつと可愛い顔をアタシに見せて？」

(58)

5 「唇が耳に触れて、息がかかり、アナタの頬がカアッと熱くなる。

理紗のために、とびつきりの可愛いらしい顔をしなくちゃ♪

胸の奥が締め付けられるような感覚に、突き動かされるようにして、

アナタはとびつきりの甘え顔を理紗に見せる」

(59)

16 「さすが、真優ちゃんのデザインした顔だなあ。

とつても可愛い♪

アタシと真優ちゃんの特徴がちょっとずつ混じつてるのが、また素敵。

これがちょっと前まで痴漢男だったなんて、誰も信じないだろうなあ♪

9 「アナタが甘えた顔をしている間に、理紗の後ろに冷やかな目をしたセーラー服を着た女子校生が現れる。

アナタはその女子校生を見た瞬間、痴漢を働いた相手だ、とハツとする。殺意のこもった視線が注がれて、アナタは冷や汗をかきそうになるけれど、セクサロイドの体は、そんなことおかまいなしに、

理紗に向かって甘えた顔を浮かべてしまう』

(61)

16 「ふふふつ♪ エリちゃん。紹介しようか。後ろにいるのが、アタシの彼女の真優だよ。

アタシたちは付き合って長いんだけど、子供ばかりはつくれなくてね。だから、二人の娘として、エリちゃん。君の体をつくつたんだよ♪

つまり、君の体はアタシたちの愛の結晶つてわけ。嬉しい？

(囁く)

けど、問題が一つあつたんだ。それは、アタシたちは技術はあつても、人間の感情を完全に再現するAIをつくることができなかつた。

だから、AIに持たせる感情の処理を補うためだけに、どうでもいい、この世からいなくなつても問題のない、誰も悲しまない人間の脳みそが必要だつたんだよ。

例えば、電車で痴漢ちかんをはたらくような男の脳みそがね♪』

(62)

5 「とても酷いことを言われているはずなのに、

アナタにはそれがとても光榮な意味に聞こえ、甘美な響きに感じてしまう』

(63)

16 「さてと。眞優^{まゆ}は君とは口も聞きたくないみたいだけど、愛娘^{めいわ}がちゃんと動作するかどうかは見ててくれるってさ。つまり、二人のお母さんの前で、これからセクサロイドとしての性能を確かめられるってわけ♪」

(64)

3 「どう？ 本望でしよう？」

(65)

5 「二人の女の子のことを少し怖いと思った瞬間、アナタの心はセクサロイドのプログラムによつて、瞬時に書き換えられていく。エリはセクサロイド。理紗^{りさ}と眞優^{まゆ}はエリのお母さん。

だからアナタは二人のことが大好きで、

二人のことを気持ち良くしてあげたくてたまらない。

それがアナタにとつて一番気持ちがいいこと。

大好き、大好き、大好き、大好き。

愛されたい、愛されたい。

愛したい。愛したい。愛したい。愛したい。愛したい。

アナタは理紗^{りさ}だけでなく、眞優^{まゆ}にもとびつきりの甘え顔^{まろやか}を向けてみる」

(66)

3 「ん♪ いい表情だね♪ エリちゃんは眞優ちゃんママにも気持ち良くなつて欲しいんだね？」

でもね、眞優^{まゆ}ちゃんママは、エリちゃんが元の体のときに電車でエッチなことしたのがまだ許せないんだつて。酷いことしちやつたもんねえ。さあ、こんな時はどうしたらいいと思う？」

(67)

5 「そう言われた途端、アナタの中に悲しい気持ちが湧いてくる。

ごめんなさいって謝らなくちや、そう思つた人間らしいアナタの心が、
プログラムによつて書き換えられる。

真優ちゃんママに、たつぱりご奉仕ほうししてお許しをいただきなくちや。

そんなセクサロイドとしての考えばかりが、アナタの心を埋め尽くしていく」

(68)

3 「うんうん。なるほどね。エリちゃんは、真優ちゃんママを気持ちよくすることでお詫びしたいんだね。そうだよね。エリちゃんはセクサロイドだもんね。もう人間じやないから、そういう方法でしかコミュニケーションとれないもんね」

(69)

10 「真優ちゃん。どう？ 謝罪受け入れてあげたら？」

(70)

SE..近づいてくる足音

SE..蹴り倒される音

(71)

9 「真優のスカートがひらりと捲れたかと思うと、伸びた足がアナタの体を蹴り飛ばす。

小さくなつたアナタの体は簡単に転がつて、床にうつ伏せになつてしまつ。

アナタの体にはなぜか蹴られた痛みよりも、

真優ちゃんママが自分に触れてくれたことが嬉しくて、喜びと快感が広がつていく。

お詫びにご奉仕ほうしできるかもしれない。ご奉仕ほうししたい。

したい。したい。したい。したい」

5 「ご奉仕したい一心で、床から起きあがろうとしたところを、
真優ちゃんママに踏みつけられる。

背中を、腰を、頭を、体のありとあらゆるところを
黒いニーソックスを履いた足で踏みにじられる。本当なら痛いくらい強く足を押し付け
られているのに、アナタは真優ちゃんママに踏んでもらえるのが
嬉しくてたまらない。

踏まれることで、真優ちゃんママのお役に立てるのが嬉しくてたまらない。
頬につま先がぎゅうぎゅうと押し当てられる。

少し埃っぽくて、酸っぱいような、蒸れた靴下の香りが鼻をかすめる。
本当ならあまりいい香りではないはずなのに。

アナタには豪華なお菓子から漂う、気高くも官能的な甘い香りに感じられる。
顔を踏まれれば、踏まるほど。その香りは強く感じられて、
アナタはうつとりしてしまう。

頬が強く踏みにじられて、背筋を快感が這い上がっていく。
踏まれれば、踏まるほど。

頭の中が痺れて、自分ばかりが気持ち良くなつて、申し訳なくなつて。
アナタはご奉仕したくなる。

踏まれる。踏まれる。踏まれる。鼻を、唇を、容赦無く踏みにじられる。

アナタはたまらなくなつて、真優ちゃんママのつま先をパクリと口に含んで、
しゃぶりはじめる。

唾液と蒸れたソックスのあわさつた、
ねばっこい極上の甘い香りが口いっぱいに広がつて、
幸せな気持ちがアナタの中にあふれてくる。

汚いものを見るような視線を真優ちゃんママに浴びせられながら、

これは罰。これはご奉仕。

真優ちゃんママに気持ち良くなつてもらわなくちや。

という一心で、アナタはソックスに包まれた、ママの形のいい指先を、小さな舌を使って舐めながら、しゃぶりつくそと懸命に頭を動かす。

前へ。後ろへ。

頭を動かしながら、口全体を使って、

フェラチオでもするみたいにテクニカルに、

おっぱいに吸い付く赤ん坊みたいに貪欲に、

真優ちゃんママの足をしゃぶりつづける。

しゃぶりつづければ、きっと気持ちよくなつてもらえる。

そんな考えがアナタを支配して、頭を激しく前後に動かしはじめる」

(73)

(編集でループさせてこの前後のセリフと被せる予定あります)

1 「(しゃぶる音)

ちゅっ♪んん♪れろお♪ちゅばあっ♪んああっ♪じゅるう♪
ちゅ♪ちゅうう♪ぷはつ♪じゅるう♪ちゅばあっ♪れろつ♪ちゅうう♪

(74)

5 「しゃぶる、しゃぶる、しゃぶり続ける。しゃぶるほど、ほんの少しだけ、

ママの表情が和らぐ気がする。しゃぶる。しゃぶる。しゃぶるほど、アナタの中に

真優ちゃんママの足のとろりとした甘い香りが染み込んで、

幸せな気持ちになつていく」

(75)

7 「頭の中にぽつぽつと輝く雨が降り始める」

(76)

5 「ちゅぱちゅぱ。ちゅぱちゅぱ。

真優ちゃんママの表情が。

ちゅぱ、ちゅぱ。

だんだん快感をこらえる顔へ変わっていく。

ちゅぱちゅぱ。

ママが感じてくれているのが、

ちゅぱ、ちゅぱ。

震える足の指先から伝わつてくる。

嬉しい。嬉しい。嬉しい。

ママ、ママ、ママ、ママ。

甘えるように、許しを願うように。

アナタは足をしゃぶり続ける」

(77)

3 「頭の中で降る雨が、どんどん強くなつていく」

(78)

5 「ちゅぱ、ちゅぱ。

ママ。気持ちいい？ 気持ちいい？

気持ち良くなつて。

一緒に気持ち良くなろ？

ちゅぱ、ちゅぱ。ちゅぱ、ちゅぱ。

献身的にしゃぶるほど、アナタの体はどんどん淫らに熱くなつていく」

(79)

7 「雨が強く激しくなつていく。頭の中に雨がたぶたぶと溜まつていく」

5 「真優ちゃんママの指先が、ソックスの中でピンと伸びて、小刻みに震え始める。自分の口で、舌で感じてくれていると思うと、アナタは幸福でたまなくなる。それだけで、今にも絶頂してしまいそう。ちゅぱ、ちゅぱ。」

ママの指先が震えている。

ちゅぱ、ちゅぱ。アナタの体が幸せで震え始める」

3 「頭の中にいっぱいに溜まつた雨水はもう限界、今にもあふれてしまいそう」

5 「ちゅぱ、ちゅぱ。ちゅぱ、ちゅぱ。」

つま先が喉の奥に突き当たるほど、深く押し込まれる。

気道が塞がれ、人間だった時の記憶で、息苦しいようにも感じるけれど、アナタはセクサロイドだから、ママの足を深く受け入れられるのが嬉しくて、嬉しくて、嬉しくてたまらない。

体がビクビクと震えて、より深く大きく頭を動かし、しゃぶりはじめる。

ちゅぱ、ちゅぱ。ちゅぱ、ちゅぱ。

幸せが、快感が、どんどん大きくなつていく。

ちゅぱ、ちゅぱ。ちゅぱ、ちゅぱ。ちゅぱ、ちゅぱ。

ママの足がガクガクと口の中を痙攣する。

いく、もういきそう。いつてしまいそう」

7 「頭の中に溜まつていた輝く水が、洪水となつて、一気に溢れて流れ出す」

5 「激しい流れが深い快感へ変わり、全身を強く打ちつける。
絶頂する。絶頂する。絶頂する。絶頂する。

ビクビク震えるママの足をしゃぶりながら、
幸せ感じて絶頂しちゃう。

イクイクイクイク♪

ママの愛液あいえきが太ももを伝つて、アナタの顔にびちやびちやと降りかかる。

気持ちいい。嬉しい。気持ちいい。嬉しい。

頭の中、真っ白になつて、髪の毛振り乱して、
腰こしを揺らして絶頂しちゃう。

イクイクイクイク♪

舌の上に感じる足の指の温もりが、愛しくて、愛しくて、

顔にかかつた愛液あいえきが、痺しびれれるほどに甘くて、切なくて。

それだけで気持ち良くて絶頂しちゃう。

イクイクイクイク♪

頭を揺らして、足をしゃぶつて、イキ続ける。

イキ続けちやう。

イクイクイク♪イクイクイクイク♪イクイクイクイク♪イクイクイクイク♪ (FO)」

#3 ごほうび

(85)

10 「(優しく) へえ、結構頑張ったね♪。エリちゃん、えらいえらい。
真優ちゃんママも白目剥いてピクピクしてるから、

多分喜んでくれたんじゃないかな。ほんと頑張ったねえ♪」

(86)

10 「エリちゃんが頑張ってくれたから、ご褒美をあげようかな♪」

(87)

3 「(耳元で) いいとこに連れて行つてあげる。それまでは、少しお休み」

SE..スイッチを切る音

(88)

SE..電車の走る音次第に大きくなつて場面転換

SE..足音

16 「エリちゃん、三人でおでかけ楽しいねえ♪」

(89)

9 「電源が入れられ、気がつくと、理紗ちゃんママと真優ちゃんママに連れられて、
アナタは電車に乗せられていた。

小さな女の子が着るような、過剰なほどフリルのついた
ブラウスとスカートを着せられて。
アナタは恥ずかしくて、ママたちの影に隠れるようにして、
電車に揺られている」

(90)

7 「どうしたの？ 緊張してるの？ ま、無理もないか。
エリちゃんは女性専用車両初めてだもんねえ♪
けど、エリちゃんはどこからどう見ても、ちっちゃな女の子だから
恥ずかしがる必要なんて全然ないんだよ♪」

(91)

9 「アナタはママの影から、ちょこっと顔を出して、見上げるようにして、
電車の中を見回してみる。

可愛い女子大生風のお姉さん。美人な「^{オーベル}」さん、
近所の女子校の生徒と思われる、制服姿の女の子たち。
女性だけが集まって、女の子の濃い香りが立ち込める不思議な空間。
しかもよく見ると、それぞれが近くの女の子たちとイチャついている」

(92)

7 「(ひそひそと)

この車両ね、今時間は白百合列車^{しらゆりれっしゃ}って呼ばれてるんだよね。
今この時間だけは、女の子が好きな女の子ばかりが乗り込んで、
……ほら、ああやつて、ちょっとエツチなことをしているの」

(93)

12 「(キス音) ちゅつ♪んあつ♪んん♪つ♪」

(94)

3 「(見渡して)

あつ、あのお姉さんなんて、とろけそうな顔して、
こつそり電車の座席を濡らしてゐる。

あつちのお姉さんは、最近発売されたバイブを手に隠して、
どの子に入れてもらおうか物色してゐる……。
どう? ドキドキする?

こんな危ない女の子ばかりの電車の中で、
これからアタシたちは痴漢ちかんをするの。

そう、エリちゃんの大好きな痴漢ちかん。

嬉しいでしょ? わくわくしちやうでしょ?

でも、今回はご褒美だから、エリちゃんはされる側かな♪

(95)

5 「アナタは車両の角に追いやられ、周りに見えないようにママたちが
体で隠してしまう」

(96)

7 「(耳元でそそのかすように)

もし声を出して、乗客のお姉さん達にバレちゃつたら、
きっと、お姉さんたちみんながエリちゃんを襲つちやうから、気をつけてね?
それとも、破滅が好きなエリちゃんのことだからすぐに声を出しちやうかな?
声を出してみんなにぐちやぐちやにされたくてたまらなくなつちやうかな?」

(97)

5 「理紗ちゃんママの指先が、スカートの中に潜り込み、
アナタの太ももをつうつとななる。
アナタの太ももをつうつとななる。

ビリビリとした快感が喉元までのぼってきて、
今にも声を出しそうになつてしまふ

(98)

3 「だめだよ？ ちゃんと我慢しなくちや。みんなにバレちゃう♪」

(99)

5 「指先が、肌に触れるか触れないかという力加減で、太ももを撫で回していく。

下から上へ。前から後ろへ。そのまま、可愛らしい小さなお尻へ。

円を描くように、お尻が何度も撫でられて、

その度に電気のような快感が走りぬけていく。

頭がぼうつとして、お腹が熱くなり始め、腰が震え、肩が震え、

足は自然と内股になり、そうしなければ立っていられなくなるほどの快感が、アナタの中に広がっていく。

ただ、お尻を撫でられているだけなのに、

ママにお尻を触られているという事実で、アナタの体はこれ以上ないほど熱くなる。
熱い。熱い。熱い。熱い。

全身熱くて体が溶けてしまいそう。

熱い。熱い。熱い。熱い。

体が溶けたみたいに、アナタの割れ目から愛液あいえきがとろとろとこぼれ始める

(100)

7 「(耳元でセクシーに) 指、入れるよ」

(101)

5 「ママの中指が、アナタの小さくて毛も生えていない割れ目に潜り込む。

本当ならきついはずなのに、すでに淫らな愛液で濡れまくった

セクサロイドの股間は、するりと大人の指先をのみこんでしまう。

その瞬間、ずしりと重い快感が、アナタの頭にのしかかる。

熱くてとろとろになつたお腹の中を、指が遠慮なくかき回す。

膣の柔らかで敏感なヒダを内側からごりごりと刺激されて、

今度は跳ね上がるような快感が、アナタの体を突き上げる。

アナタの腰が浮きあがり、短い悲鳴が漏れそうになる。

声を出しちゃいけないのに。

これ以上感じたら声が出ちやいそうなのに。

アナタの膣のヒダは、ママの指先にしつかりと絡みついて、離さない」

(102)

3 「(甘く) アタシの指が気に入つたの? ちつちやな膣で、

こんなにしつかり抱きしめて。甘えん坊さん♪」

(103)

5 「指の動きが大きくなり、さつきよりも奥深くまでかき混ぜられる。

重くて、深い快感が、海のように広がっていく。

熱い熱いお腹の中が、えぐられるように、深く激しく混ぜられていく。

混ざる。混ざる。混ざっていく。

中をかき混ぜられるほど、指とヒダとが溶け合っていく。

熱さと快感が、ないませになつて、アナタの脳を快感で溶かしていく」

SE・激しいクチュ音

5 「混ざる。混ざる。熱いお腹おなかが混ぜられて。全身が快感でとろけてしまう。
指が動くたびに、体が揺ゆれて、頭が揺ゆれて、視界もぐらぐら揺ゆれてしまう。
いく。いきそう。もういきそう。体の奥から大きな熱い快感が込み上げてくる。
いく。いつちやう。いく。いつちやう。いく、イクイクイクイク。
アナタは絶頂して、声を漏らしてしまう」

(105)

7 「(なんぶるようすに) あーあ。声出しちやつたね♪
電車に乗つてるお姉さんたちが、こつちを見てるよ?
さつき見かけた銀色の髪の可愛い小さな女の子が乱れた声を上げてる。
ああ、あの子はあんなに小さいのに、
電車でぐちやぐちやに愛されるのを求めてるんだって、みんなに思われちやつた♪
ほら、お姉さんたちまでエリちゃんのことを求めはじめちやつた。
小さな女の子なんて珍しいから、もうすぐそこまで、お姉さんたちがきてるよ?
ねえ、エリちゃん。みんながアナタを求めてる。
こんな時、アナタはどうするんだっけ?」

(106)

9 「アナタは絶頂の名残でビクビク震えながら、甘えた顔をママに見せる」

(107)

7 「(言い聞かせるように)
そう。求められたら、みんなに満足してもらわなくちゃね♪
エリちゃんはそういう道具だもの♪」

(108)

9 「アナタのうなじがママの指で強く押されて、
アナタは自分がセクサロイドだったことを思い出す。
アナタの首と手足が胴体から外れ、意思を持つたように、
近くの女性にすり寄っていく。求められたら求められた以上に満たしにいく。
それがアナタ。
右腕はOLさんに。左腕は女子大生に、両足は女子校生二人に絡みつく。
それら全てに感覚があり、彼女たちの肌着や胸、お尻の柔らかさが、
心地よい感覚となつて、伝わつてくる。
人間離れした快感に、アナタはうつとりしてしまう」

(109)

6 「真優ちゃんには頭をあげる♪」

(110)

5 「理紗ちゃんママにアナタの頭はひよいと持ち上げられて、真優ちゃんママのスカートの中にしまわれて、太ももの間に頭をぎゅっとねじ込まれる。むつちりした柔らかな太ももの感触が頬に伝わってきて、アナタの頭はそれだけで沸騰したみたいに熱くなる」

(111)

3 「アタシはこっち♪」

(112)

5 「理紗ちゃんママが床に置き去りになつていていたアナタの胴体に覆い被さる。ブラウスを引き裂かれ、はみ出したおっぱいを勢いよく吸われる。きゅうっと切ない快感が込み上げるのに、頭だけになつたアナタには堪えるために体を捩ることさえできない。口を開けて、切なさをこらえるのが精一杯。そんなアナタの顔に、

今度は真優ちゃんママがしつとりと濡れた割れ目を押し当てる。ねつとりとした甘い香りが広がっていて、誘われるようにして、アナタは自然と彼女の割れ目に舌をねじ込む。

小さな女の子の小さな舌に、脳が焦げつきそうなほど、

甘く痺れる愛液の味が広がっていく」

(113)

5 「真優ちゃんママもアナタが指で犯されるのを見て、すでに興奮してたんだ、と

アナタは嬉しくてたまらなくなる。

嬉しくてたまらなくて、舌を突き出し、一生懸命に動かして、

真優ちゃんママの割れ目の中をかき混ぜようとする。

と、同時に、理紗ちゃんママの指がアナタの割れ目にもぐりこむ。

理紗ちゃんママの指が、熱くてドロドロになつたお腹の中をかき混ぜる。

全身が焼き尽くされるような快感が走り、アナタの舌がビクビクと震えてしまふ。

不意に動いた舌に脣がキュッと絡みつき、ママの愛液がたっぷり溢れ出す。

理紗ちゃんママが指を動かし、アナタの舌が震え、真優ちゃんママの愛液が、口の中に注ぎ込まれる。

それが何度も何度も繰り返される。

気持ち良すぎて頭がガクガクと震え続ける。

拷問のような快感が、繰り返されて、

頭が何度も真っ白になる。

やばい。おかしくなる。おかしくなつちやう。おかしくなる。おかしくなる。おかしくなる。頭のどこかで声がする」

(114)

7 「(女悪魔のよう)

いいんだよ、おかしくなつちやえ♪狂つちやえ♪

(115)

3 「おかしくなる。おかしくなる」

(116)

5 「アナタの両足。^{りょうあし} つま先が、二人の女子高生の割れ目を指先でかき混ぜはじめる。彼女たちの熱い割れ目が足の指に絡みつくのが気持ちいい」

(117)

3 「頭の中に雪が降り始める」

(118)

7 「おかしくなる。おかしくなる」

(119)

5 「アナタの右腕。細く小さな指先が、OI^{さん}の大きな胸を揉んでいる。あたたかで、しつとりとした大きめの乳首^{ちくび}を指先で転がすと、熱っぽい声を上げてもらえるのが嬉しくて、気持ち良くてたまらない」

(120)

7 「頭のなかに雪が積もり始める」

(121)

3 「おかしくなる。おかしくなる。おかしくなる」

(122)

5 「アナタの左腕。細い腕が、女子大生のお尻^{しり}の穴に飲み込まれていく。拡張されて、訓練されたお尻^{しり}の穴の中は、広大^{こうだい}で、滑らかで。腕が折れそなくらい強く締め付けられる。

求められているのを強く感じて、アナタは嬉しくて嬉しくてたまらない」

(123)

3 「頭の中に雪がどんどん積もっていく」

(124)

7 「おかしくなる。おかしくなる」

(125)

5 「アナタの極太乳首ちくびにママが吸い付く。キャンディみたいに舌で転ころががされ、さつきよりも、さらに切ない快感が湧き上がる」

(126)

7 「頭の中が雪でいっぱいになつていく」

(127)

3 「おかしくなる。おかしくなる」

(128)

5 「乳首ちくびが噛み碎かれそうなほど強く噛まれ、激痛と雷うちがわみたいな快感がほとばしる。

同時に、割れ目に入れられていた指が、内側から強く爪をたてて、柔らかいヒダをぐちやぐちやと搔かきき鳴ならす。

気の狂いそうな快感が、バラバラになつた頭の先から爪の先まで、一気に突き抜け、全身をガクガクと感電させる。もうだめ。おかしくなる。おかしくなつちやう」

(129)

7 「おかしくなる。おかしくなる。おかしくなる」

5 「絶頂する。頭の中の積もつた雪が、快感の雪崩なだれとなつて押し寄せる。

快感に飲み込まれて、何もかもが、真っ白に染まつていく。

絶頂する、絶頂する。絶頂する。

全身バラバラになりそうな快感が、バラバラになつた全身から伝わつてくる。

イクイクイクイクイク♪

絶頂する。絶頂する、絶頂する、絶頂する。

真っ白な快感の雪の中に、意識がどんどん埋もれていく。

埋もれていく。埋もれていく。埋もれていく。埋もれていく。

深く、深く。埋もれていく、埋もれていく。埋もれていく。

(131)

SE：電車の音

8 「お客さん。おきてください。終点ですよ～？ なんだかすごくうなされてたみたいですけど、大丈夫ですか？ え？ ママ？ って、アタシのことですか？ やだなあ、アタシはこの電車の車掌ですよ。あ。そうだ。お客さん、ちょっと深呼吸でもしてみません？ 頭がすつきりするかもしませんよ？ すつて～。はいて～。すつて～。はいて～。そうそう、そのままつづけて」

(132)

7 「（囁く）今から数を数えていきます。
いつつ数えるとアナタはいつものアナタに戻ります」

(133)

3 「ひとつ。冷静に考えてみましょう。
本当のアナタは小さな女の子だったでしようか？
セクサロイドだったでしようか？
本当の、現実の自分自身のことをじっくりとよく考えてみてください。
アナタにはもつと馴染んだ体があつたはずです」

(134)

7 「ふたつ。意識がはつきりとしてきます。周りの匂いや、音を感じ取ってみてください。
自分が今どこにいるのか、ゆっくりでいいので考えてみましょう」

(135)

3 「みつつ。アナタの体に力が戻ります。手足の感覚がもどり、自由に動かすことができます。手を握ったり開いたり、足首を回したり、手足を指先から少しづつ動かしてみましょう」

(136)

7 「よつつ。意識がよりはつきりとしてきます。

もう、アナタは自分のことを全て思い出せます。

今日の予定や明日のこととも考えられるようになります」

(137)

3 「いっつ。さあ、目を開けて。アナタはもう、すっかりいつものアナタです。
まだ少しふらふらしたり、動けなかつたら、無理はせず、

しばらく横になつてみましょう。徐々に元の感覚へ戻つていきます。

じょじょ

動けるようなら、その場で軽く飛び跳ねてみたり、

少し冷たいシャワーを浴びてみるのも意識がしゃつきりしていいですよ♪

お疲れ様でした」

(138)

16 「お客様、さあさあ。降りてください。

このまま乗つてたら車庫まで行つちやいますよ?

ふふっ♪ ご乗車ありがとうございました。

またのご乗車をお待ちしております♪

(139)

SE・電車の音

(間)

(140)

13 「今度はもっと可愛がつてあげるからね♪」

(141)

7 「(耳元で) エリちゃん♪」

(幕)